

第10回

平日の 午後のコンサート。

7.6(金)14:00開演

東京オペラシティ コンサートホール

Fri, July 6, 2018, 14:00

at Tokyo Opera City Concert Hall

〈敬子、七夕の夜へ〉

With Mo. Keiko on a "Tanabata" Eve

指揮とお話 三ツ橋敬子

Keiko Mitsuhashi, conductor & speaker

フルート 工藤重典* Shigenori Kudo, flute *

ハープ 山宮るり子* Ruriko Yamamiya, harp *

コンサートマスター 近藤 薫 Kaoru Kondo, concertmaster



chie H.

ヘンデル: 組曲『水上の音楽』より「アレグロ・デチーソ」(約4分)

Handel: Alla Hornpipe from "Water Music" Suite No. 2 in D major (ca. 4 min)

メンデルスゾーン: 劇音楽『真夏の夜の夢』より「結婚行進曲」(約5分)

Mendelssohn: Wedding March from "A Midsummer Night's Dream" (ca. 5 min)

モーツァルト: フルートとハープのための協奏曲 八長調 K. 299/297c * (約30分)

Mozart: Concerto for Flute, Harp, and Orchestra in C major, K. 299/297c (ca. 30 min)

— 休憩 (約15分) —

チャイコフスキー: バレエ組曲『くるみ割り人形』より「花のワルツ」(約7分)

Tchaikovsky: Waltz of the Flowers from Ballet "The Nutcracker" (ca. 7 min)

ビゼー: 『アルルの女』第2組曲 (約17分)

Bizet: L'Arlésienne Suite No. 2 (ca. 17 min)

ワーグナー: 歌劇『タンホイザー』序曲 (約15分)

Wagner: "Tannhäuser" overture (ca. 15 min)

主催:公益財団法人東京フィルハーモニー交響楽団

助成:文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)

Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra

Subsidized by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan



7/6



©大杉隼平

三ツ橋 敬子 指揮とお話

Keiko Mitsuhashi, conductor & speaker

東京都生まれ。東京藝術大学及び同大学院を修了。ウィーン国立音楽大学とキジアーナ音楽院に留学。第10回アントニオ・パドローティ国際指揮者コンクールにて日本人として初めて優勝。第9回アルトゥーロ・トスカニーニ国際指揮者コンクールにて女性初の受賞者として準優勝。併せて聴衆賞も獲得。第12回齋藤秀雄メモリアル基金賞を受賞。これまでに国内の主要オーケストラを客演するほか、ジュゼッパ・ヴェルディ響、スロヴァキア・フィル、などヨーロッパでの定期演奏会にも客演を重ねている。

2009年にはNewsweek Japan誌にて「世界が尊敬する日本人100人」に選出。2016年から神奈川県立音楽堂にて「三ツ橋敬子の新★夏休みオーケストラ」がスタート。子供たちへ多彩な音楽体験を届ける企画内容が好評を得ており、本年8月には横須賀芸術劇場にて第3回を迎える。

7/6

工藤 重典 フルート

Shigenori Kudo, flute

国際的フルーティストとして活躍する工藤重典は、1979年にパリ国立音楽院を一等賞で卒業し、恩師ジャン・ピエール・ランパルに認められ、リサイタルやマスタークラスを40ヶ国、180以上の都市で開催。1978年、第2回パリ国際フルートコンクール及び、第1回JPランパル国際フルートコンクールでそれぞれ優勝。現在、東京音楽大学教授、エリザベート音楽大学客員教授、昭和音楽大学客員教授、パリ・エコール・ノルマル教授を務めている。2015年、フルートを演奏し始めて50年目の記念プロジェクトを各地で展開し成功をおさめた。



©土居政則

山宮 るり子 ハープ

Ruriko Yamamiya, harp

新潟市出身。2007年渡独、ハンブルク国立音楽演劇大学、同大学院にて研鑽を磨く。2009年ミュンヘン国際音楽コンクールハープ部門第2位、2011年リリー・ラスキーヌ国際ハープコンクール優勝はいずれも日本人初の快挙。ケルン・ギュルツェニヒ管弦楽団首席ハーピストを経て、2015年帰国。国内ではこれまでに東京交響楽団、NHK交響楽団、兵庫PAC管弦楽団と共演。NHK「クラシック倶楽部」、テレビ朝日「題名のない音楽会」出演。2016年「スパイラル」(レコード芸術誌特選盤)でCDデビュー。



7/6

プログラム・ノート

解説=柴田 克彦

7/6

七夕前日、午後のひと時。夏空に響く恋の調べ

今回は「敬子、七夕の夜へ」と題して、平日&休日の「午後のコンサート」ではおなじみの三ツ橋敬子が、この時期にちなんだ作品、夜や恋にまつわる作品を聴かせます。

『水上の音楽』は夏の夜の舟遊びのBGM、『真夏の夜の夢』は夏の夜の妖精や恋人たちのおとぎ話で、「結婚行進曲」は当然結婚に関係し、モーツァルトの『フルートとハープのための協奏曲』も結婚祝いに書かれたといわれる作品。前半の各曲はどれも幸福感に溢れています。『くるみ割り人形』は少女クララの夜の夢物語ですが、『アルルの女』は一転して田舎の青年の一途な恋の悲劇。『タンホイザー』も乙女の自己犠牲によって恋人の魂が救済される話ですから、やはり一途な恋の物語といえるでしょう。後半は幸福感一色ではありませんが、音楽自体は雄大かつ快適で、カタルシスを存分に感じさせてくれます。

暑さも増してきたこの時期、気っ風のいい三ツ橋敬子がおくる爽快な音楽に、心地よく浸りましょう。



©上野隆文

王様のために書かれた、ふたつの名曲

幕開けは、ドイツに生まれたバロック音楽の大家ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル(1685-1759)の組曲『水上の音楽』から「アレグロ・デチーソ」。ヘンデルはイギリスに渡って活躍し、国際的な名声を得ました。代表作の1つ『水上の音楽』は、イギリス国王ジョージ1世がテムズ河で催した舟遊び(50人ものオーケストラを舟に乗せて行った徹夜の大宴会)のために書かれた作品。1717年7月から数回に亘^{わた}って作曲されたとみられています。中でも有名な「アレグロ・デチーソ(=決然と)」は、3/2拍子の華やかな音楽で、歯切れの良い中間部が挟まれます。



ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル(1685-1759)

次いで、ドイツ初期ロマン派の代表格フェリックス・メンデルスゾーン(1809-1847)の劇音楽『真夏の夜の夢』より「結婚行進曲」。あまりにおなじみのこの曲は、1843年にプロイセン国王ヴィルヘルム4世の命で書かれた劇付随音楽からの1曲です。劇自体は、盛夏ではなく夏至の頃、不思議な出来事が起きるとされる聖ヨハネ祭前夜の物語。「オペロン王やいたずら好きのパックが活躍する妖精の世界、領主や4人の恋人たちがいる宮廷の世界、ロバに変身させられるボトムなどの村人の世界が入り混じり、魔法による混乱の末に丸く収まる」といった、おとぎ話的な喜劇です。「結婚行進曲」は、二組の恋人が結婚式をあげる第5幕への前奏曲。喜び溢れる壮麗な主部に、優雅な中間部が挟まれます。



フェリックス・メンデルスゾーン(1809-1847)

音楽好きの父娘のために書かれた フルートとハーブの協奏曲

前半最後は、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756-1791)の『フルートとハーブのための協奏曲』。まだザルツブルクにいた青年モーツァルトは、1777年9月から1年半に及ぶ求職の旅「マンハイム・パリ旅行」を行いました。本作は、1778年4月、その途上のパリで、音楽愛好家のド・ギーヌ公爵と令嬢のために作曲されました。父はフルート、娘はハーブを演奏し、共に巧みだった(それは作品自体からも窺い知れます)とのこと。いずれも貴族に人気の楽器で、そのたしなみが珍しい組み合わせの名曲誕生に繋がり、特にハーブ奏者に貴重なレパートリーをもたらしました。

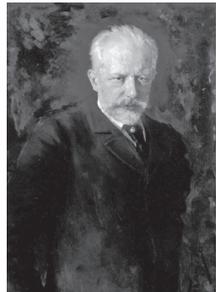
当時は共に楽器構造上の制約があり、フルートに至っては「我慢できない楽器」とまで言っていたモーツァルトですが、演奏しやすいハ長調を選び、複雑な転調や展開は避けながら、次々と新しい楽想を繰り出すなどの工夫によって、典雅さわまりない音楽を作り出しています。アレグロ／アンダンティーノ／ロンド、アレグロの全3楽章。令嬢の結婚祝い、あるいは結婚式での演奏を想定したともいわれており、全体に幸福感が横溢しています。



ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756-1791)

チャイコフスキーの「三大バレエ」より、 おとぎの国の名曲

後半最初は、ロシア最大の巨匠ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー(1840-1893)のバレエ組曲『くるみ割り人形』より「花のワルツ」。本作は、『白鳥の湖』『眠りの森の美女』に続く三大バレエの第3弾で、最晩年の1892年、ペテルブルクのマリインスキー劇場の依頼によって作曲されました。



ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー(1840-1893)

E.T.A.ホフマン原作の物語は、「少女クララがクリスマス・イヴにもらったくるみ割り人形が、夢の中で王子に変身。ねずみとの戦いで王子を救ったクララはお菓子の国に招待され、様々な踊りの歓迎を受ける」といった楽しいファンタジー。「花のワルツ」は、お菓子の国でこんべい糖の精の侍女たち(演出によって変わります)が踊る、本作の看板曲です。遅い序奏、美しいハーブ・ソロを経て、夢幻的なワルツが展開され、ホルン4本のアンサンブルなど管楽器の巧みな活用が際立っています。

フランスの天才・ビゼーが描いた悲恋の物語

代わっては、歌劇『カルメン』で知られるフランスの天才作曲家ジョルジュ・ビゼー(1838-1875)の『アルルの女』第2組曲。本作は元々、フランスの文豪ドーデー作の3幕の劇の付随音楽で、1872年に作曲されました。物語は「南仏プロヴァンス地方の農村の青年フレデリは、アルルの町の妖艶な女に恋するも、家族に反対され、幼なじみの村娘と婚約する。だが祭りの日、アルルの女が情夫と駆け落ちすることを知って、高い窓から身を投げる」といった悲劇。ただアルルの女は劇中に一度も登場しません。



ジョルジュ・ビゼー
(1838-1875)

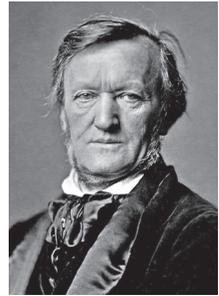
ビゼーは小編成の音楽を27曲作曲し、その内の4曲を通常編成の演奏会用組曲に編曲しました(=第1組曲)。そして彼の死後、友人の作曲家エルネスト・ギロー(1837-1892)が、別の3曲にビゼーの歌劇『美しきパースの娘』の「メヌエット」を加えた第2組曲を編纂。共に高い人気を得ていますが、今回はよりポピュラーな後者が演奏されます。

第1曲「パストラール」 は第2幕の前奏曲。力強く広々とした田園曲で、中間部はプロヴァンス太鼓をまじえた田舎風舞曲となります。**第2曲「間奏曲」** は、荘厳な前奏に続いて、サクソフォンが瞑想的な旋律を奏でます。**第3曲「メヌエット」** は、ハーブの伴奏に乗ってフルートが歌う美しいナンバー。別作品からの借用ながら、『アルルの女』の代名詞となりました。**第4**

曲「ファランドール」は劇の最終場面。プロヴァンス民謡「3人の王の行列」を用いた行進曲から、村人たちが踊る舞曲に移り、2つの旋律が交錯する熱狂のクライマックスを迎えます。

壮大・爽快な序曲で始まる ワーグナーのオペラ『タンホイザー』

締めくくりは、ドイツ・ロマン派オペラの巨人リヒャルト・ワーグナー(1813-1883)の歌劇『タンホイザー』序曲。オペラ自体は、1845年に完成、同年ドレスデンで初演された比較的初期の作品で、「愛欲の女神ヴェーヌスのとりこになった騎士で吟遊詩人のタンホイザーは、歌合戦で官能を賛美して輦盛を買い、懺悔の旅でも許されないが、乙女エリーザベトの身を犠牲にした祈りによって救済される」といった物語です。序曲は、敬虔な「巡礼の合唱」の部分に、官能的なヴェーヌスベルクの部分が挟まれる形で書かれています。ホルン等による「巡礼の合唱」の旋律に始まり、チェロで「悔恨の動機」が登場。次第に力を増してテンポの速いヴェーヌスベルクの場面に移ります。歓楽とヴェーヌスを讃える賑やかな音楽が続いた後、「巡礼の合唱」が戻り、金管楽器を中心とした壮大な終結部に至ります。



リヒャルト・ワーグナー
(1813-1883)

しばたかつひこ(音楽ライター)／音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。雑誌、公演プログラム、宣伝媒体、CDブックレット等への寄稿、プログラム等の編集業務のほか、一般向けの講演や講座も行うなど、幅広く活動中。著書に「山本直純と小澤征爾」(朝日新書)。